

河村廣幸●編集

リハビリに直結する！ 運動器画像の見かた

評者 中川法一

増原クリニック副院長

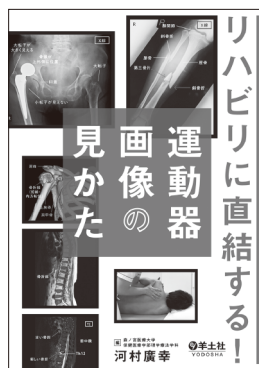
本書を初めて手に取りページをめくるたびに笑みを浮かべる自分に気づいた。「そうそう、こんな本を待っていたのだ！」という嬉しさが思わずこぼれたのだ。

シャウカステンに吊り下げられたX線写真にトレーシングペーパーで透写をさせられ、その行為に疑問を感じたことがある御仁は決して少なくないと思う。骨折線や白蓋形成不全の部位を透写することに意味を見出せないなかで、その行為への適切な指導も示唆もなかった。医師の真似事をして何の意味があるのだという思いを持ちながら何年間も自己学習を進めるなかで、運動器障害の理学療法に必要な多くの情報が得られることがわかり、画像は今では欠かせない情報源の一つとなっている。医師が画像診断を行うのとは違い、私たちが画像を見る意味は、画像から損傷組織を推察し、運動療法を行ううえでの適応や禁忌(リスク)を考えるための重要な情報源であるからである。私たちが若かりしときに本書があれば、無駄なことを繰り返すような遠回りをせずに患者診療に画像情報が活かせたと思うと実に口惜しい限りだ。

このように本書の最大の特徴は、理学療法士という職に立脚した画像情報の活用方法が、わかりやすく丁寧に書かれている点である。医師が画像から何を得ているのかという視点から始まり、リハビリテーションに必要な障害像の根拠、リスク(注意点)そしてプログラム立案へのヒントが画像から得られる知見として簡潔にまとめられた力作であり、運動器を扱う現役理学療法士には座右の書となるであろう。特に新人理学療法士にとっては私たちのような遠回りを回避するうえでも必携の書であり、臨床実習へ向かう学生にとっても心強い味方になってくれよう。画像の見かたとタイトルされているので、掲載された多数の写真は実に見やすく注釈も親切で見

やすい工夫がなされているが、編者プロフィールに目を通して「なるほど」と納得できた。また、本書にはX線画像[computed tomography(CT)含む]だけでなく、magnetic resonance imaging(MRI)やエコー検査画像までもが網羅されており、各々の基礎的知識を修得できるようにコンパクトな解説が加えられている点も、読者にとっては嬉しい付録であろう。

現在進行形で日本理学療法士協会の生涯学習システムの再構築が行われており、画像の理学療法的理解に関するカリキュラムが10時間近く設定される見込みであり、実に時宜を得た上梓である。



B5判・279頁
定価：本体4,800円＋税
羊土社刊，2017年